

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520080

研究課題名(和文)「京大文化史学派」の学問史的研究 - 民俗宗教史を中心として -

研究課題名(英文) Intellectual and Socio-cultural study of "the Kyoto University Cultural History (Bunka-shi) School"

研究代表者

菊地 暁 (KIKUCHI, AKIRA)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：80314277

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦前の京都帝国大学文学部史学科の国史学教授・西田直二郎とその門下生を中心として展開した「京大文化史学派」における民俗宗教史研究を多角的に検討し、その多面的な影響を残の学問史的意義を解明することを目的とした。研究期間中には、京都大学所蔵「民俗調査会」資料の基本的な整理を完了させた。これにより、同資料の本格的な研究が可能となった。また、同資料に含まれる16ミリフィルムで取り上げられた民俗行事の再訪調査を実施した。これにより、当該行事の変化を具体的に確認し、今後の伝承に生かす視点が確保された。

研究成果の概要(英文)：This study aims to investigate the intellectual and socio-cultural history of "Kyoto University cultural history (Bunka-shi) school." Dr. Naojiro Nishida (1886-1964), the chair of the Japanese History in Kyoto Imperial University, and his pupil studied the Japanese religious history under the multi-disciplinary influence of folklore studies, archaeology, anthropology, which made unique contributions in this field and has been called "Kyoto University cultural history (Bunka-shi) school." Their research materials (notes, books, photos, movies and so on) are preserved at the Kyoto University Museum. We made a basic catalogue of them. We also took some "revisiting fieldwork" of the research field where the school had studied in 1930's, which can show the socio-cultural changes of these areas. In this way, our project show the detailed images of the school and provide basic date which can be used for the further research of the school and its research fields.

研究分野：宗教学・民俗学

キーワード：京大文化史学派 文化史 宗教史 民俗学 西田直二郎

1. 研究開始当初の背景

近年、社会における学問のあり方がドラステックに変容するとともに学問と社会の関係性を問う研究がさまざまな形で試みられている。宗教研究もその例外ではない。

その成果の一つが、「宗教」概念の系譜学的研究である。この問題に関しては、磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜』(2003、岩波書店)、島園進・鶴岡賀雄編『<宗教>再考』(2004、ペリかん社)などの研究において、近代西欧に誕生した「宗教」概念が明治期以降の日本に移入されるにあたって、不平等条約、国家神道との関連など、さまざまな時代状況に起因する概念形成がなされていたことが明らかにされている。「宗教」概念を、時代状況への問いかけを抜きに使用することは、もはや不可能なのである。

こうした動向を、「学説史」から「学問史」へ、という見取図で整理することができる。「宗教学」というディシプリンの存在を前提してその内部における学説の進歩を叙述する「学説史」を超えて、ディシプリンの外延と内包を規定していく同時代状況とのダイナミックな相関関係そのものの検討をめざす「学問史」という視点を確立することが必要なのである(磯前順一「<日本の宗教学?再考学説史から学問史へ>」、2008、『季刊日本思想史』72)。

『季刊日本思想史』72号(2008)の特集「近代日本と宗教学」は、そうした視点に基づく特集だが、その編者の林淳・磯前順一による

序文は、今後の重要な課題として、東京大学中心になりがちな日本宗教学史の叙述を、それ以外の研究機関や研究団体を視野に収めた包括的なものとする、明治期に厚い研究蓄積を、さらに、大正期、昭和期、現在へと拡張すること、狭義の「宗教学」への偏向を、歴史学、思想史、民俗学、人類学など多様な隣接諸科学からの「宗教研究」を踏まえて是正すること、の3点をあげている。

そして、このような課題を具体化する最適の対象が「京大文化史学派」であると考えに至った。

2. 研究の目的

本研究は、戦前の京都帝国大学(以下、京大)文学部史学科の国史学教授・西田直二郎(1886-1964)とその門下生を中心として展開した「京大文化史学派」における民俗宗教史研究を、その理論的系譜、調査技法、資料集積過程、研究者ネットワーク、同時代社会との関連などを多角的に検討し、宗教学、歴史学、民俗学、文化人類学などの分野に多面的な影響を残した「京大文化史学派」の学問史的意義を具体的に解明することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究の作業は大きく分けて二つある。

一つは、「京大文化史学派」に関する資料である「民俗調査会」資料の整理と分析。関係者の残したノート、写真、録音、映像、標

本などから、同学派の具体的な活動を復元する。同学派に関連する他大学の資料の調査もあわせて実施する。

もう一つは、「民俗調査会」資料に残された資料の調査地で再訪調査を行い、同学派による調査の実態を再検討するとともに、同資料を調査に還元・活用する方策を検討することである。

以上の資料調査と再訪調査を有機的に組み合わせ、「京大文化史学派」の具体像を立体的に浮かび上がらせることが本研究の課題である。

4. 研究成果

研究機関において京都大学所蔵「民俗調査会」資料の整理分析を実施、資料公開にむけての整理をほぼ完了させた。

その結果、同学派が京大國史学研究室関係者を中心としつつ、東洋史、考古学、地理学など京大史学科全体、医学部、理学部、農学部などからも参加者を有し、このほか、関西在住の民間の郷土研究者、日本各地からのゲスト参加者などを迎え、地域的にも分野的にも広範なネットワークを作り出していたことが明らかとなった。

このほか、京都大学人文科学研究所・内藤文庫（内藤 ）、京都大学経済学部図書室・河上文庫、大阪市立大学学術情報総合センター・新村文庫、大阪府立大学・中尾佐助資料、新村記念財団・重山文庫、成城大学民俗学研

究所・柳田文庫、同・平山文庫、板橋区立郷土資料館・桜井徳太郎文庫、佛教大学・竹田文庫、同・西田直二郎旧蔵書および資料、南方熊楠顕彰館、皇學館大学・原田敏明每文社文庫、長崎歴史文化博物館・山口麻太郎文庫、元興寺文化財研究所などの資料調査を実施した。

また、京大文化史学派の民俗調査に関連する再訪調査として、京都市内の地藏盆行事、京都市松ヶ崎題目踊、滋賀県大津市酒井神社のおこぼまつり、滋賀県大津市日吉大社祭礼、兵庫県神戸市長田神社の節分行事、京都府京丹後市・深田部神社祭礼のフィールドワークを実施した。

上記の調査に基づき、戦後の民俗学の中心的課題の一つであった「祖霊信仰」研究についても、「京大文化史学派」にユニークなアプローチがあったことが確認された。大局的にみて、その特徴は以下の三点にまとめることができる。

まず、「仏教者」が読んだこと。三品彰英は、自分はミッション系の大学に勤めているが「かくれなき坊主」であると語ったというが、京大文化史学派には、三品以外にも、五来重、竹田聴洲、西田直二郎と僧籍にある学徒が少なくなかった。こうした人的環境が、結果的に、「仏教アレルギー」とは無縁に『先祖の話』を読み解くことを可能にした。神仏習合を基調とした日本民衆宗教史の理解にあたって、この意義は決して小さくはない。

つぎに、「隣接分野」とともに読んだこと。

この学派は基本的に「歴史家」だが、同時に、考古学、地理学などへの造詣も深く、宗教学、仏教学などとの交流も盛んだった。こうした環境ゆえに、民俗資料のみならず文献資料、考古資料も合わせて柳田のテーゼを検証したことが第二の特徴といえる。そうした作業を代表するものとして、五来重により主導された元興寺極楽坊から発見された膨大な中世庶民信仰資料の研究が挙げられる。

最後に、「近畿 / 西日本」で読んだこと。竹田が奈良、京都を主な調査地とし、五来が高野山を拠点としたように、京大文化史学派は「近畿 / 西日本」をフィールドとすることが多かった。族制、墓制にみられる近畿的 / 西日本の特徴、豊富な文献資料の残存といった条件が、彼らの研究に与えた影響については相応の配慮が必要だろう。

以上のように、「京大文化史学派」にフォーカスすることで、従来の民衆宗教史研究の到達点と今後の課題を、より具体的に確認することが可能となった。こうした作業をひきつづき展開させたい所存である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

菊地暁著 2011.05 「ブッディスト・アンソロポロジスト赤松智城」『近代仏教』18:44-59

菊地暁著 2013.11 「主な登場人物2 京大文

化史学派における『先祖の話』受容」『日本民俗学』276:52-68

[学会発表](計 2件)

菊地暁報告「私が資料について感じる二、三のこと 京大文化史学派研究から」(2012年9月9日日本宗教学会大会@皇學館大学)

菊地暁報告「主な登場人物2 - 京大文化史学派における『先祖の話』受容 -」(2012年12月2日京都民俗学会年次大会シンポジウム「いくつかの『先祖の話』」@佛教大学)

[図書](計 1件)

菊地暁著 2012.03 「<ことばの聖>二人 - 新村出と柳田国男 -」横山俊夫編『ことばの力』京都大学学術出版会 pp.3-36

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

慶応義塾大学出版HP連載「人文研探険 - 新の履歴書 - 」に関連する成果を連載中。

(<http://www.keio-up.co.jp/kup/sp/jinbunken/>)

内容：

01「再開にあたって あるいは「方法としての京都」

02「1968年 = 新京都学派の終焉？ あるいは、新京都学派を「再領有」するために 」

03「桑原武夫の何がそんなに偉いのか？ - 「歴史家・桑原武夫」を考える - 」

04「桑原武夫の東北 - その「フィールドワーク」を考える - 」

05「「文学」というフィールド、「共同」の夢 - 「文学者・桑原武夫」をあらためて考える」

06「ポルトレの人 桑原武夫 - その人物描写を考える」

07「『分館』雑感」

08「東方部の「折口フアン」たち - あるいは、「新しい歴史学」としての考古学とミンゾク学 - 」

09「『世界文化』と人文研 - あるいは、治安維持法の悲喜劇 - 」

10「『ポナペ島』管見 - 京都探検地理学会ポナペ島調査（1941）の足跡をたどって - 」

11「中国大陸と水野清一 「新しい歴史学」としての考古学とミンゾク学2 」

12「宮本常一と水野清一 「新しい歴史学」

としての考古学とミンゾク学3 」

13「『遠野物語』と人文研 内藤湖南旧蔵・初版本『遠野物語』を機縁として 」

14「南方熊楠と人文研 四者四様の接点から」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊地暁 （京都大学人文科学研究所助教）

研究者番号：80314277

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：